

## 学生たちの感想文から

学生たちは毎夜、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 2 回訪日を記録した。以下ではその一部を紹介する。

日付：11月26日（月）1日目

大学名：北京大学

氏名：李鑫

親切だった「神座」の店員

日本での最初の夕食は「神座」のラーメンだった。美味しいラーメンにきちんと片付いた店内が印象に残った。中でも感激したのは親切な店員さんたちだった。温かいラーメンを運んで来てくれた時に、ちょっと頭を下げて謝意を表すと、「はいっ！」と礼儀正しく応じてくれた。

どの店員さんもきびきびと働いていた。彼女たちにとって仕事は楽しいものであって、まったく負担に感じていない様子だった。店員さんたちはひっきりなしにある言葉を声をそろえて言っていた。それがどんな意味かは解らなかったが、彼女たちのハツラツとした楽しげな雰囲気は感じる事ができた。

何と前向きな生活態度だろうと思った。自立して生活していることの誇りに溢れていた。こうした人生こそが、楽しく意義のある人生かもしれないと思った。親切で前向きな「神座」の店員さんたちを羨ましく思うと同時に、尊敬の念がわいてきた。

日付：11月26日（月）1日目

大学名：北京工業大学

氏名：劉雷

ゴォーという飛行機の離陸音とともに、私たち《走近日企、感受日本》代表団一行の気分も自ずと高揚してきた。今日から私たちの10日間の「日本を感じる」旅が始まるのだ。

3時間弱のフライトで関西国際空港に着いた。みんな少々疲れた様子だったが、この日は比較的余裕のあるスケジュールになっていた。「神座」（ラーメン店）である有名な日本のラーメンを味わった後、専用車に乗って宿泊先のホテルに着いた。

今日だけでもいろいろと新しい経験をした。中でも印象的だったことは、日本人の思いやりと緻密さだった。日本人が細部をいかに大事にしているかを実感した。

最初の出来事は次のようなものだった。ホテルまで旅行社が用意してくれた大型観光バスに乗ったが、すべての座席の前にゴミ袋が備え付けられていた。これは中国のバスとは大きな違いだった。ゴミ袋があれば、便利で衛生的だし、周りを汚すこともない。これは取るに足りない小さい事かもしれないが、ゴミ袋を見て、日本人は何をするにも、どうしたら「人にやさしく」なるかをまず考えるのだということが分かった。

次は「神座」ラーメン店で食事をしていた時に目にした子供用の定食だ。食器がすべてアニメのキャラクターで作られているだけでなく、小さなオモチャのプレゼントまで付いていた。子供の嬉しそうな表情が忘れられない。中国でもマクドナルドやケンタッキーなど、こうしたサービスをしているところもあるが、ほとんどのレストランは客層や対象を分けたサービスはしていない。この点は大いに学ぶべきだと思った。

三番目は、日本のいたる所に置かれている自動販売機についてだ。機械を使えば人件費

は少なくてすむし、消費者にとっても非常に便利だ。消費者はいつでも思いついた時に、ものを買うことができるので、自ずと消費も増える。このような「人にやさしい」サービスによってもたらされる販売者と消費者のウィンウィンの関係は素晴らしいと思った。

今や、中国の大都市はハード面では決して日本にひけをとらない。場合によっては、日本よりも進んでいるようなところもあるが（中国には後発国としての強みがある）、ソフト面（人文環境）ではまだまだ及ばないところがあるように思う。僕たちはこのことをもっと真剣に考えなければならないと思った。

**日付：11月26日（月）1日目**

**大学名：南開大学**

**氏名：劉侃**

今日は朝からずいぶん忙しい思いをしたが、夕刻日本に着いた。

飛行機を降りた時の印象は、北京とあまり変わらないというのが正直な感想だった。都市建設という意味では、北京市の規模と発展の度合いは、この大阪と比べても見劣りしないし、むしろ大阪より進んでいるような気がしたくらいだ。

しかし、たとえ物質文明的には大きな差が無かったり、あるいは少しばかり進んでいるとしても、都市文化や道徳的な面では、北京は日本に遠く及ばないと感じた。

日本の大阪で北京との違いを最も感じたのは、人を大事にする細やかな配慮と人々の道徳的な資質だった。街の店員さんたちの笑顔は、北京でよく目にするあのこわばった生気の無いものと違い、心の底から湧き出るような笑顔だった。言葉は解らなくても、笑顔があれば多くの問題が解決できるし、笑顔が街を人情味溢れるものにする。また道徳面でも、日本人の意識の高さには驚かされた。一人も信号無視をする人がいなかった。車の走っていない道路でも、立ち止まって信号が青になるのを待つ人たちがいた。こうした交通規則遵守の意識の高さは想像以上のものだった。

中国の大都市も建築物などの物質的な面では、先進国と同じようなレベルかもしれないが、都市の文化や道徳的資質という面では、依然発展途上にある（実はこれこそが最も解決の難しい問題である）。北京よ、中国よ、本当の意味で先進国と同じレベルになるにはまだまだ長い時間が必要だということか……。

**日付：11月27日（火）2日目**

**大学名：北京大学**

**氏名：李林**

今、僕は名古屋のホテルの部屋で都市が発散する息吹のようなものをゆっくりとかみしめている。

今日の主な見学先はオムロン太陽工場だった。この障害者のための工場は、決して私が想像していたような労働集約型の工場ではなく、従業員の技術レベルの向上に熱心に取り組んでいた。工場には身障者自らが研究開発した機械がたくさん置かれていたが、そうした機械によって作業がしやすくなり、身障者の自己実現を可能にしていた。

実は午後の寺院参観に最も興味があった。なぜなら、宗教学は僕の専攻（哲学科）の中でも非常にセンシティブな分野であり、ずいぶん前から信仰を持つべきかどうか悩んでいたからだ。もちろん、ここで言う「信仰」とはカトリック教のことだが……。

三つの寺院はどれも大乘仏教の寺で、観光客で溢れていた。大乘仏教では誰もが成仏で

きると説くが、「菩薩」という仏の存在が中国と日本で仏教が盛んに信仰される有利な条件となっている。

京都の古くて落ち着いた雰囲気がとても気に入った。これこそが民族精神の真の体現だと思った。中国もこうした日本の伝統文化に対する思いをもっと学ぶべきだと思った。

日付：11月27日（火）2日目

大学名：北京郵電大学

氏名：衣情

今日は日本訪問の2日目。私にとっては本当に日本を見ることのできた最初の日だったとも言える。車中、ガイドの呂さんがいろいろ説明してくれたが、多すぎて覚えきれなかった（車酔いのためにメモがとれなかった）。それでも日本人のきれい好きなどが印象に残った。道路や自動車のきれいなことといたらなかった！運転手は私たちが見学している間、何もすることがなくなると、ガラスやタイヤを拭いていた。ガラスはいつもピカピカだった。次に印象に残ったのは日本人の礼儀正しさだ。隣近所の関係もとても良いようだった。それにひきかえ、今の中国は近所同士の付き合いが何と希薄になってしまったことか……。

最初の目的地は京都にあるオムロン太陽工場だった。思いもよらなかったことに、そこは身障者のための福祉会社で、オムロンと「太陽の家」が共同経営するオムロンの子会社の一つだった。ここで作っている製品は携帯電話のバックライト、交通信号灯、血圧計、体温計など、どれも小さなものだが、私たちの生活になくはならないものばかりだった。そこは人間と機械の理想的な関係の実現を目指し、社会福祉に努め、身障者が自己実現を果たすための機会を提供する場所ではあったが、単なる慈善事業ではなかった。工場は彼らが身障者だからといって甘やかすということはなく、作った製品が合格品かどうか一つ一つを厳しく検査していた。また、工場は身障者自身の手になる発明や創造を奨励し、彼らの体力ではなく、智恵を活かす工夫をしていた。

昼食後に高台寺を訪れた。日本の古い建築は美しく、荘厳だった。それは中国の長安と洛陽に倣って建てられたというが、中国の建築とはまた趣が違っていた。高台寺では日本の茶道を体験した。正直言って、苦くてあまり美味しいとは思わなかったが、和菓子はとても美味しかった。私もお茶を点ててみたが、先生によくできたと褒められた。次に高台寺にほど近い清水寺を見学した。断崖の上に舞台が建てられていた。檜皮葺の屋根が木の大柱で支えられていた。境内の中に知恵・財産・美しさを代表する3本の名水があったが、時間が無くて飲めなかった。

なぜ時間がなかったのかと言えば、私たちは名古屋行きの新幹線に乗らなければならなかったのだ。乗ったのは「のぞみ」で、トンネルのたびに耳がおかしくなった。

最も嬉しい時間が来た！カニ尽くしの宴会だ！和室で美味しいカニを食べて、まさに至福の時だった。ホテルの後ろにあったスーパーで梅干を買って食べてみたが、そのまずいことといたらなかった。気持ち悪くなって吐きそうになった。日本の梅干には徹底的に失望させられた！

日付：11月27日（火）2日目

大学名：南開大学

氏名：郭曉菲

日本に着いた翌日、集合時間までにまだ時間があったので、ホテルの外で待っていた。美しい時間だった。道の両側に整然と植えられた金色に輝くイチョウの樹。イチョウは中国では珍重され、周囲に柵がめぐらされているほど大事にされている樹だ。品種が違うのかもしれないが、あれほどたくさんの美しく輝くイチョウの樹が、ごく普通の道端に植えられている景観は、まるで鮮やかな色彩溢れる油絵のようだった。

のんびりと写真を撮る私たちと、早足に通り過ぎる日本人は強烈なコントラストをなしていた。効率と時間の観念がこの工業大国の国民一人ひとりに徹底されているようだった。

京都は落ち着いた雰囲気になり、その簡素で伝統的な民家が私の心をなごませた。

オムロン太陽工場で紹介のビデオを見たが、次の一言に涙が出た。「私はずっと税金を納めたいと思っていたので、昨日、初めて納税証明を受け取った時は本当に嬉しかった。これで私も役に立つ人間だということが証明されたのですから……」。身障者に働く場所を提供しようとしたら、余計なコストがかかる。いろいろと力を費やして身障者に働いてもらうよりも、直接補助金を与えるほうがずっと簡単で現実的なものかもしれないが、経済的な方法では計算できないこともある。達成感や人間としての誇りは決して他人から与えられるようなものではないと思う。

私は次のような質問を試みた。「御社の身障者に対する思いやりと援助は素晴らしいことだが、中国では障害を持つ従業員の数が一定比率を超える企業には税制面の優遇政策がある。また、御社は社会福祉団体とも協力しているが、利益分配システムはどのようになっているのか。また、身障者が働く職場となると、機械の改良が必要になり、効率やコストを犠牲にすることになる。工場への投資が利益を上回った場合は、社会効果はあっても、経済効果は望めないことになるが、これについてはどのように考えているのか」。

回答は以下の通りだった。「①土地は政府が提供している。②親会社の優遇価格がある。③オートメーション化した設備で効率を高め、利益が上がるように努力している。④会社の収支はバランスしている」。

私の質問は経済学専攻の学生としてコストと利益を考えすぎるあまり、辛辣すぎたきらいがあるが、身障者に自己実現のための機会を提供しているという点には心を動かされた。

また、現場の第一線に立つ身障者の手になる技術革新と発明が印象的だった。彼らは単なる労働者ではなく、クリエイティブな創造者なのだ。私にはハードウェアや経済指標上の格差以上に、日本と中国のイノベーション能力の格差のほうが切実な問題のように思われた。中国人もこうした質の高い生活ができること、また中国人も日本人のように進取の精神を持つようになってほしいと強く思った。

午後の高台寺での茶道体験と清水寺の風景の中で最も印象深かったのは、緑の山々と林を赤く染め尽くしている紅葉だった。真っ赤な紅葉は生命力溢れる「紅い」火のような純粹さと透徹も象徴で、赤と黄色が一面に広がっていた。私は目を閉じてそれに駆け寄り、しっかりとそれを抱きしめ、それと一つに溶け合い、永遠に童話の世界のような完璧な静けさと美しさに身を投げ出した衝動に駆られた。

カニ尽くしの宴会では、見識を広めることができた。

夜、父にハガキを書いた。南開大学に入学し、また学生会の役員を務めていた関係で今回の代表団の一員に選ばれ、こうしてすばらしい旅をし、その中で様々なことを学び、日本の美食と美しい景色を堪能している。お世話になった人々、先生、主催者、旅行社に感謝しなければならないと思った。そして両親がこれまで大事に育ててくれたからこそ、今の私がある。心の底から感謝した。

中国のお父さん、お母さん、おやすみなさい……。

日付：11月28日（水）3日目

大学名：北京大学

氏名：李月

今日の行程は名古屋―豊田市―横浜だった。一日でずいぶん長い距離を移動したことになるが、トヨタ自動車の訪問が最も印象深かった。

「車到山前必有路、有路必有豊田車(車が山のふもとに到れば必ず道がある。道があれば必ずトヨタの車がある)」と、袁団長が口にしたこの広告コピーは、確かにトヨタというブランドの中国におけるイメージと、高品質・低エネルギー消費に代表される日系自動車のイメージそのものだ。5時間に及ぶ見学の中では堤工場が最も印象に残った。堤工場はトヨタ本社周辺に12ある自動車組立工場の一つである。そこではウィッシュ・プレミオ・アリオン・サイオン（初代）・カムリ・プリウス（2代目）の6モデルが生産されていた。高効率かつ人間本位に設計された生産ラインで多品種混合生産方式による秩序立った生産が行われていた。工場見学では以下の点が心に残った。①高度に機械化された生産方式により、作業員の労働強度を最大限低減させている。②徹底した人間中心の設計で、人為的なミスが起こる確率を減らしている。③「かんばん方式」によりできるだけ在庫量を減らしている。④生産ラインをルール化することで自動車の生産効率を高めている。堤工場の細部に配慮した緻密な設計には驚くばかりだった。例えばかんばん方式による部品調達、生産ライン脇の赤いひもスイッチ、音楽や液晶表示による注意喚起等々、どれも小さなことだが、中国の工場が学ぶに値するものばかりだった。そしてその核心は従業員による工具の改善と提案の奨励と推進にあるのだと思った。

日付：11月28日（水）3日目

大学名：北京航空航天大学

氏名：彭犇

トヨタ堤工場＋トヨタ会館

組立ライン：ライン全体が人に与える印象は「静かな忙しさ」だった。おそらくこれまで自動車広告（その中には自動車の組立工程に関する紹介があった）をいろいろと見ていたこともあり、堤工場の組立ラインを見ても格別新鮮な感じがあったわけではなかったが、よく考えてみれば、今、私は世界でも屈指のトヨタ自動車のコア工場に身を置いているのだ！そう思ったとたん、心臓がドキドキしてくるのを感じたが、堤工場の全体的な印象はとても穏やかなものだった。なぜなら、すべての作業が秩序立って行われ、トラブルが発生しても、それはどれも想定内のことなので、慌てふためくことも無く、完璧に順を追って効率良くトラブルの処理ができるようになっているからだ。整然とした秩序の中で作業が進められているので、どんなに忙しくても混乱することがない（まさに誰もが願う境地）。トヨタはその計画と工場内規律によって、数千人の大工場であろうが、数十万人の従業員を擁するグループ全体であろうが、どこも同じように整然と生産活動が行われているわけだが、この点はまったく敬服するほかなかった。秩序とグループの良い伝統を維持しつつ、常にモチベーションを高め、褒賞を忘れず、従業員の創造性を顕彰し続けている点は、中国も大いに参考にできると思った。

溶接ライン：4-6台の巨大な機械が両側に置かれ、ラインの準備が完了するのを待っていた。作業員がプログラムを操作して指示が出されると、すぐに最速かつ最高精度の作業が始まった。たまに「中国からのきれいな女子学生を見て恥ずかしくなって止まってしま

う」(袁団長の冗談) こともあったが、その時はその時で静かに修理されるのを待っていた。それはオートメーション化された機械と人間の調和であった。また、毎年 60 万トンの溶接廃棄物が自動車以外の産業で最大限活用されているとのことだったが、それはまさに生産と環境の絶妙な調和だと言えよう。

トヨタ会館：トヨタグループの上層部から一般従業員にいたるまで、その一貫したプロ精神に感服した。私と他の 9 名の代表団メンバーは質疑応答の時間に質問できなかった。ので、昼食をとりながらの質問の機会が与えられた。本社と中国部からの数名が、食事もそこそこに私たちの質問に終止真剣に答えてくれた。通訳を務めてくれた二人の中国人社員にいたっては、まったく食事がとれない状況で申し訳なかった。

また、日本の子供たちが無邪気で活発なことにも驚いた。トヨタ会館を見学している時に、やはり見学に来ていた日本の子供たちに会ったのだが、そのうち何人かは中国語が話せた。中国語で「ニーハオ！」と挨拶し、別れる時にも「ツァイチェン（再見）！」と言うのを忘れなかった。異国で経験した心温まる瞬間だった。また、ロボットの演技を見ていた時に、子供たちが床に腰を下ろしていたが、それは後ろの人の邪魔にならないようにという配慮からで、こうした日本人の子供の頃からの教育には感心させられた。

**日付：11月28日（水）3日目**

**大学名：北京郵電大学**

**氏名：笥晨**

朝、豪華な朝食を楽しんだ後、トヨタ自動車に向かった。この世界有数の自動車工場その王者としての風格を一目見たとたんに、ずっと前に流行った「車到山前必有路、有路必有豊田車(車が山のふもとに到れば必ず道がある。道があれば必ずトヨタの車がある)」という耳慣れたキャッチコピーが思い出された。トヨタ、クラウン、カムリ等の名前はぜひぶん前から知っていたが、いわゆる「百聞は一見に如かず」で、今日はバラバラな部品が完成車に組み立てられていく様子を初めて見ることができた。作業員たちが忙しそうに、かつ整然と働き、工場内は静かで、空気もきれいだった。床にはゴミが無く、標準的な清潔で近代的な工場だったが、その全面的なオートメーション化が最も印象的だった。すべての工程はコンピュータ制御でミスが出ないようにになっていた。「大」は機械の組立や溶接から「小」は 1 個のナットの保管と補給にいたるまで、すべてオートメーション化された情報伝達が採用され、世界一流の製造ラインと言うに恥じないものになっていた。工場見学の後、ホールに展示されていた完成車を見学したが、その中にはハイエンド車種もいくつかあった。最後にロボットによる演奏があり、それが午前の見学終了を告げるピリオドになった。

その後、一時間半新幹線に乗った。それは日本の長距離交通を体験する良い機会になった。中国よりずっと楽な旅だった。新横浜駅に到着後、中華街に行ったが、そこは中国人が溢れ、誰もが友好的で親切だった。異国の地でこうして同胞に出会い、慣れ親しんだ言葉を耳にしたときの感じは格別だった。夕食は「重慶飯店」で食べたが、中国語を話すウェイトレスはいなかった。

**日付：11月29日（木）4日目**

**大学名：北京大学**

**氏名：劉薇**

今日は企業4社を見学し、とても忙しい一日だった。

先ず鎌倉にある資生堂の工場を見学した。「資生堂」というブランド名は普段から耳にしていたし、自分でもいろいろな化粧品を使っているが、今日のように至近距離で化粧品の製造過程を見るのは初めてだった。資生堂の見学で最も心に残ったのは、同社の品質に対する厳しい要求と環境保護分野における貢献だった。工場全体が様々な安全・衛生・運転・検査基準を遵守し、製品品質が確保されていた。廃棄物の回収利用では、最良の方法を考え尽くしてゴミを100%回収し、ゼロエミッションを達成していることは称賛に値することであり、見習うべきだと思った。

新日本石油根岸製油所では、石油精製のプロセスを見学したが、日本経済を牽引している原動力のようなものを感じた。

午後は東京のNECブロードバンドソリューションセンターの見学だった。見るもの、聞くもののすべてが新鮮で、「人を基本とする科学技術」とはどういうものかが分かったような気がした。かわいいロボット、オフィスの新しい働き方、安全管理の設計では、いろいろと啓発を受けるところがあった。

夜は「世界500強企業」の一つである住友商事東京本社を見学し、大いに見聞を広めることができた。長い歴史のある住友商事は様々な分野で事業を展開し、環境保護と社会貢献にも積極的に取り組んでいた。社員との懇親会では、日本企業とその社員の仕事ぶりについて知ることができた。住友商事の心づくしのもてなしがとても嬉しかった。

日付：11月29日（木）4日目

大学名：北京工業大学

氏名：張旭

企業4社を見学し、忙しくも充実した一日だった。

資生堂：

工場見学後の印象は以下の三点にまとめられる。①きちんと整理されていて清潔——工場に入る前に全員帽子をかぶり、衣服についている埃を取り除いた。作業員が帽子・マスク・手袋で完全武装していた。②ハイスピード——すべてがオートメーション化され、作業員は検査と監督をするだけでよかった。人の手を機械に代替させたことで生産効率が数倍から10数倍高まった。③環境保護——工場からのゴミと汚水はすべて回収されていた。工場内に汚水処理施設があり、水の循環利用が実現できていた。また、資生堂の包装はすべて分解性樹脂を使っており、自然環境に配慮したものになっていた。

新日本石油根岸製油所：

短い見学の中で最も印象に残ったのは、やはり環境保護施設と防護施設であった。入港したタンカーの石油漏出を防止するために、専用の防油フェンスが設置されていた。製油所の原油貯蔵タンクの周囲にもすべて防油フェンスが取り付けられていた。また、製油所周辺の道路と住宅地にはウォータースクリーンのパイプラインが通っており、火災が発生すると、水が噴き出して高さ10数メートルのウォータースクリーンを作り、火の回りを阻止するようになっていた。建設コストがかさみ、伝熱効率も低いので、中国ではあまり見かけない空気による大型冷却塔が採用されていた。中国ではむしろ従来型の水による冷却塔が多いが、この方法は用水量が多く、しかも水を汚染するので、水の節約にも環境保護にも不利である。また、製油所内の廃水処理技術も非常に進んでいた。処理後の水はリサイクル利用され、処理後の水の中では水鳥が遊んでいた。重工業企業でありながら、ほとんどゼロエミッションの域に達していた。

NEC :

IT 設備と通信設備のインテリジェント化およびヒューマンインターフェースの面で初めての体験が多かった。機械と人の手の絶妙なコンビネーションによって簡単かつスピーディーな生活が実現されつつあった。

住友商事 :

歓迎懇親会が用意され、中国籍社員を同伴させてくれた。懇親会では、地球環境部部長と話しをすることができたが、同氏によると、中国での環境保護事業は非常に難しく、客観的に見て、中国の環境汚染の程度は想像を超えたものになっているという。住友商事には天津に海水淡水化装置建設の計画があるが、実地調査の結果、汚染の程度がすでに簡単な方法で処理できる範囲を超えていることが判明した。「もし効果的な方法が見つからないか、または海水の汚染物質含有量がこのまま改善されなければ、悲しいことだが、このプロジェクトは立ち行かなくなる」と残念そうに言っていた。また、中国市場の将来性に対する十分な自信がうかがえた。今はまだ事業範囲が沿海地区に限られているが、西部地区と東北地区の市場にも注目しているということだった。

日付 : 11 月 29 日 (木) 4 日目

大学名 : 南開大学

氏名 : 李欣瑞

今日の日程は非常にコンパクトに組まれていて、一日で資生堂・新日本石油・NEC・住友商事という日本を代表する企業 4 社を訪問した。忙しくて少々疲れたが、たくさんのことを学び、多くの収穫があった。資生堂の品質管理は厳し過ぎるほどの要件で管理されていたが、まさにこうした常に良いものを目指す精神が、数十年もの間、同社をして化粧品業界トップの座に君臨させているのだと思った。また、資生堂の産業廃棄物のリサイクル利用率は 100%で、そのために多くの人力・資材・財力を費やしているが、環境と国民生活全体のことを考えて、たとえコストがかさんでもやり遂げるといった気概が感じられた。その企業としての高い責任意識に敬服するとともに、私たちが学ぶべきだと思った。

住友商事はある意味、奇跡的なビジネス展開をしていると思った。投資分野が非常に広く、事業内容も豊富だった。多元的な投資をすることで投資リスクを下げ、利益増を目指すこともできるが、それにより生じる資金の過度な分散は、力を集中させてある産業を発展させるという意味ではマイナスに働き、無視できない問題となる。住友商事がこの法則を打破し、「ラーメンから鉄道まで」といったビジネスを展開していることは、感嘆に値することだと思った。住友商事はまさに「Nothing is impossible if you put your heart into it (それに心血を注ぐなら、不可能な事は何も無い)」という言葉の正しさの証しだと思った。

日付 : 11 月 30 日 (金) 5 日目

大学名 : 北京工業大学

氏名 : 宋大林

午前、東京タワーと皇居外苑を見学した。世界的大都市としての東京の気概と日本皇室の厳かな美しさを実感した。

みずほコーポレート銀行が盛大な昼食会を開いてくれた。見学した中では、人事制度が一番印象的だった。北京大学附属中学校や清華大学附属中学校を含む世界各地の学校に奨学金制度を設け、早いうちからの人材確保に力を入れているということだった。またディ

ーリングルームも見学したが、ディーラー間の分業が秩序正しく行われていた。一人ひとりのスペースが狭く、ごちゃごちゃした環境ではあったが、誰もが整然と一心不乱に仕事に取り組んでいた。

昼食会のときに「ディール」という言葉の意味を知った。「ディール」とは外貨や証券の取引のことをいう。「ディール」では銀行が重要な役割を果たすことになるが、つまりユーザーに手法・サービス・投資銀行を提供することが、即ち「ディール」だということ。

**日付：11月30日 5日目**

**大学名：北京航空航天大学**

**氏名：周池**

今日のスケジュールは盛りだくさんだった。朝から小雨が降っていたが、東京タワーと皇居の見学は予定どおり行なわれた。二重橋では記念写真をたくさん撮った。

その後、みずほコーポレート銀行を見学した。ディーリングルームが最も印象深かった。ディーリングルームは一つの大きな部屋で、スタッフ全員がそこで仕事をしており、仕事の内容によって幾つかのチームに分かれていた。ディーリングルームに入った瞬間、その緊張した雰囲気伝わってきた。スタッフたちが山積みされたデータやレポートの中で机に向かって何かを書いて（描いて）いた。電話が引切りなしに鳴り、顧客担当係りが電話を取っては、顧客と金額などについて確認していた。受注後は別のチームに回され、具体的な作業が開始される。相当な数のチームをすべて一つの大きな部屋に入れているのも、お互いすぐ連絡を取り合い、情報交換をし、仕事の効率を上げるためだという。中に暇そうにしているチームがあったが、それはパリなどのエリアを担当しているチームで、時差の関係で通常一番忙しくなるのは夜の3時からだという。そうした時間に人が働くというのが信じられなかった。

みずほコーポレート銀行は福利厚生が行き届いていると聞いていたが、今回の見学を通じて、その福利厚生が実はハードワークと引き換えになっていることが分かった。朝の6時から夜の10時、11時まで働くこともあるという。本当に苦勞して仕事をしているのだ。「Hard work makes worth」という言葉をしっかりと胸に刻みつけた。

**日付：11月30日（金）5日目**

**大学名：北京郵電大学**

**氏名：李鵬**

主な訪問先：東京タワー、皇居、みずほコーポレート銀行、ディズニーランド

ディズニーランドで思いっきり遊んだのもうへトへト。立っていられないくらい疲れた。この数日、忙しいスケジュールが続いていたのもう限界。今日の活動をいろいろ書けば長くなるので、以下のように簡単にまとめてみた。

1. みずほコーポレート銀行では、職員がたくさんのモニター画面をひっきりなしに操作したり電話で連絡をとったりと、とても忙しそうだったが、整然と、効率よく自分の仕事をこなしていた。概況説明の時に、担当者から投資について少し説明があったが、私たちのような門外漢でも理解できるように分かりやすく話してくれた。
2. 天気はあまり良くなかったが、ディズニーランドを楽しもうという気持ちにはまったく影響なかった。エントランスゲートをくぐるやいなや、みんな夢中になって遊んだ。ユーモラスなアトラクションを見たり、スリリングなジェットコースターを体験した

り、大小さまざまなスポットを見て回った。もちろんあのすてきなパレードも見逃さなかった。初めてのディズニーランドはこれまで体験したことのないものばかりで、楽しさ満杯だった。素晴らしい午後+夜になった。代表団のメンバー全員、疲れてクタクタだと思うが、私の何の脈絡もない日記もこのへんで終わりにすることにする。もうダメだ……、ゲー！ゲー!!ゲー!!

**日付：12月1日(土) 6日目**

**大学名：北京大学**

**氏名：董旭超**

早起きして日中経済協会へ行き、ホームステイ先となるトヨタの山本さんが迎えにきてくれるのを待った。

山本さんはちょっと怖そうな感じがしたが、実際はとても面白い人だった。今日は是非、初めて温泉（風呂）に行ったことを書くことにしよう。

山本さんと下の息子さんが温泉に連れていってくれた。さすがは日本の温泉だ。大小様々な湯船があって、浴室が男女別々になっているものや、水着をつけて入るカップルや家族用のもの、淡水のものや海水のもの、漢方薬の入ったものなど数え切れないほどだった。湯けむりが立ち昇る様子はテレビで見たとおりで、日本に来た甲斐があったと思った。そのあと、二男の拓馬さんや彼の友人たちと一緒に居酒屋へ行った。そこはとても日本的なところだった。メニューの日本語は全くわからなかったが、これまで飲んだことのない酒や飲み物を楽しむことができた。拓馬さんの友だちの中に中国語にできる人がいたので、言葉の不自由はなかった。

一戸建て住宅の1階の客間に泊まらせてもらったが、大きな畳の部屋を独り占めできて気持ちよかった！

東京都江戸川区にて

**日付：12月1日(土) 6日目**

**大学名：北京工業大学**

**氏名：秦桐**

みずほコーポレート銀行に見学に行ったとき、ホストファミリーの中澤さんには会えなかった。武漢へ出張しているということを聞いて、中澤さんは本当に忙しい人だと思ったが、あとで日本人はみな忙しくしていることが分かった。どうりでいつも出張ばかりしているわけだ。中澤さんと奥さんには子供がいない。二人で三階建ての小さな洋風住宅に住んでいたが、「スズメは小さくても五臓は揃っている」というように、必要なものはすべて揃っていた。少し狭い感じがしたが、二人で住むにはちょうど良い広さだ。中国では、私の母親くらいの年齢の人たちの趣味と言えば、テレビドラマを見ることくらいだろうが、日本人はよりスポーツ志向だ。家にウォーキングマシンやマッサージ機などのフィットネス用のマシンを置いたり、定期的にフィットネスクラブへ行ってトレーニングをしたりと、日本人の暮らしはメリハリに富んだものだった。この点は大いに学ぶべきだと思った。

中澤さんの家で少し休んだ後、二人は私を連れて散歩に出た。歩きながら日本の風俗習慣についていろいろと話してくれた。私たちは橋の架かる溪流に沿って歩き、鬱蒼とした神社と洗足池公園を通り抜け、荏原病院の前を通過して東京工業大学の門の前に着いた。私が北京工業大学の学生だということを知っていて、わざわざ連れて来てくれたのだ。東工

大のキャンパスは、日本のこの季節はどこもそうであるように、イチョウの葉っぱが地面を覆い、静かなキャンパスに古い建物がよく調和してまるで一幅の絵のようだった。こういうところで勉強できたらどんなにいいかと思った。

夜、私がハローキティの店へ行きたがっていることを聞いた夫妻は、急いでインターネットでどこにその店があるかを調べて連れて行ってくれた。大人二人が半大人（私）を連れておもちゃを選んでいたあの場面を私は絶対に忘れない。その時はちょっと恥ずかしいと思ったが、とてもありがたかった。

**日付：12月1日(土) 6日目**

**大学名：北京航空航天大学**

**氏名：胡鈺**

盛大な拍手とともに森田童史さんが紹介された。私はこれから2日間、森田さん一家とともに本当の日本人の生活を体験することになるのだ。

最初に直面したのは言葉の問題だった。私は日本語が全くできず、英語もカタコト程度だが、幸い森田さんが英語を話したので、英語と中国語を駆使し、紙と鉛筆を使っの筆談で何とか切り抜けた。

これまでは歴史問題の影響からか、日本人に対して偏見があり、義憤に駆られることもあったが、今日、実際に森田さん一家と一緒に過ごしてみて、日本人がとても礼儀正しいことが分かった。

家に着くなり、家族全員が笑顔でお茶をついだり、果物をすすめてくれたりした。夜、一緒に餃子を作って食べていると、まるで自分の家に居るような気がしてきた。何もかもが自然で、親しみを覚えた。

晩ごはんの後、一家4人とトランプをして遊んだが、4人はとても楽しそうで、本当に仲の良い家族であることが分かった。

森田さんのお宅でもう一つ感じたことは、中国では考えられないほど部屋がきれいなことだった。中国もアジアの大国として、この点は日本に見習わなければならないと思った。

中国は本当の日本を正しく認識しなければならない。

**日付：12月1日(土) 6日目**

**大学名：北京郵電大学**

**氏名：王亦然**

不安な気持ちを胸にホームステイ先の福田さんに会った。とても明るくて親切な人で、中国語が上手だった。

福田さんは私を浅草寺にある日本の伝統的な工芸品を売る店に案内してくれたが、日本人の生活をより深く理解できたように思う。上野公園の美しい風景も忘れられない。

福田さんの家に戻り、奥さんに会った。音楽の先生をしている優しい女性だ。福田さんのお宅は伝統的な日本家屋で、ベッドではなくて畳の上に布団を敷いて寝る。福田さんは仕事を持っているが、奥さんは家で子育てのかたわらバイオリンを教えているという。

福田さんの子供の洗君と久美さんは二人とも高校生で、勉強が忙しく、今日も週末だというのに、塾へ行っていて、晩くなってから帰ってきた。

晩ごはんの後、私たちは中日両国の教育問題についていろいろ話し合った。洗君と久美さんともこれからの勉強の方向性について語り合った。

福田さん一家の親切なもてなしがとてもありがたかった。明日は福田さんの奥さんが私を陶芸に連れて行ってくれるという。明日が待ち遠しい。

**日付：12月2日(日) 7日目**

**大学名：北京工業大学**

**氏名：白晨晨**

一泊二日のホームステイが無事終わり、緊張感も多少ほぐれて来た。こうした緊張感は文化の違いから来るもので、それは時に不必要な誤解を招くこともある。だが、実際は、ホームステイの間、私はまったく堅苦しさを感じることもなく、日本人の親切なもてなしだけが印象に残った。一緒にプリクラを撮り、カラオケであゆの歌を歌い、ショッピングをし、本や中古 CD を買ったりしてとても楽しかった。今日は代表団がまたホテルに集結した。みな興奮した面持ちでそれぞれホームステイ先で体験した日本の生活のあれこれ話をしていたが、私は、日本のホームステイ先の恵まれた生活水準や温かいもてなしといったこと以外に、何かほかの感想はないのだろうかと思った。この数日間の日本での体験、特にホームステイを通じて、私は日本と中国は、どちらかがどちらかに与えたり施したり、また補償したりというような関係ではなく、経済的に共通の利益があることを実感することができた。政府レベルでは国益という問題があると思うが、では中日の国民はどうか……？中日両国の文化はどうか……？

両国の関係は、あたかも二人の子供がドアの後ろから、見たさ半分、怖さ半分で、海を隔てた相手の様子をうかがっているように見える。インターネットやメディアを通して相手を理解するだけではまったく不十分で、中国人も日本人も相手の生活を自分の目で見て、理解したいと思っているが、そのような機会はそうそうない。幸運なことに、今回、私たちは日本を理解する機会を得て、日本と中国との間に橋を架ける使者として日本にやってきた。その効果は取るに足りないものかもしれないが、たとえわずかでも、それが何かの役に立つのであれば、それは決して無駄なことではない。ホームステイ先の家族が真剣に中国について語り、中国のことについていろいろと質問してくるのを目の当たりにし、私は心から嬉しかったし、ありがたいと思った。

私たち若者に必要なのは、盲目的にならずに客観的に彼我を認識することなのではないだろうか……。

**日付：12月2日(日) 7日目**

**大学名：北京航空航天大学**

**氏名：楊強**

昨晩は畳の上に布団を敷いて寝た。暖かい布団からなかなか出る気がしなかったが、朝6時半にはもう窓の外で小鳥が鳴き始めた。ホームステイの二日目が始まった。

日本の朝は静かだった。入野さんはグーグルアースを使って私たちがいる場所や学校の位置を教えてくれた。僕たちよりずっと早く起きていた入野さんの奥さんがサラダをつくらせてくれたので、入野さんの息子さんとパンを買いに行った。日本人家庭の多くがアメリカ式の朝食をとるが、ミルクと焼きたてのパンが今日の朝食だ。

昼には日本ならではの100円ショップへ行った。中国の10元/2元均一の店に似ているが、それよりも品数がずっと多く、同じような店がたくさんあった。

今日は日本の「駐車場文化」の一端を知ることができた。セルフ式のパーキングが至る

ところにあり、とても先進的で、しかも人にやさしく、6階建ての駐車場は大小様々な車で一杯だった。駐車場の中はとても狭く、まるで険しい山道を登っているようだった。

入野さん一家と別れる時、奥さんが忘れ物をしないようにと声をかけてくれた。恥ずかしがり屋の娘さんといっしょに私の旅行の無事を祈ってくれた。一緒に買い物をしたとき、私が買いたいと思っていたCDを一家中であちこち探し回ってくれたことが思い出された。本当にありがたかった。私の中の日本人イメージ、特に日本の一般人に対するイメージが、親しみのある生き生きとしたものになった。

会えば別れるのは人の世の常、入野さん一家の健康を願いつつ、いつかまた会える日が来ることを願った。

**日付：12月2日(日) 7日目**

**大学名：北京郵電大学**

**氏名：範凡**

ホームステイの二日目は少し遅く起き、木所さん心づくしの日本式朝食を味わった。今日の朝食はいろいろと盛りだくさんだったが、普段の朝食はもっと簡単だという。食事の後、家を出て雅子さんと会い、いっしょに車で横浜へ行った。そこでは今度のホームステイで最も忘れられない出来事、つまり木所さんが出場する8人乗りカヌーレースが行われていた。僕は本物のカヌーレースというのをこれまで見たことがなかった。川べりに座って日本の友人たちとおしゃべりしながら、晩秋の川岸の美しい景色を眺め、木所さんに声援を送った。実に楽しい時間だった。木所さんは健康そのものだった。このレースは私への最高のプレゼントになった。

午後、木所さんと雅子さんが私をホテルまで送ってくれた。二人が帰る前に一緒にコーヒーを飲んだ。互いに連絡先を教えあい、別れを惜しんだ。私のためにいろいろとしてくれたことに対しお礼を言った。木所さん一家の親切を忘れることなく、いつかまた必ず会える日が来ると思った。

**12月2日(日) 7日目**

**大学名：南開大学**

**氏名：趙陽**

ホームステイの二日目だ！夏美さんはコミュニティサービスのためとかで、僕が宮村夫妻と朝食を食べる頃にはもう出かけていて家にいなかった。結局、今度のホームステイでは夏美さんとは一度会ったきりだった。テーブルの上には暖かな朝の陽光が降り注いでいた。奥さんがつくってくれた朝食は美味しく、ケーキもかわいらしかった。名残惜しいと思った。食事の後、奥さんの運転で、僕たちはお台場にある日本科学未来館に行った。

是非、ここで日本の博物館について書きとめておこうと思う。日本の博物館は「無料券」を配っているところが多いが、入館料自体も非常に安い。だからといって、展示ホールのレイアウトや展示内容の手をぬくというようなことはなく、その高い展示レベルには驚かされた。また、子ども連れの若い夫婦もたくさん見に来ていた。日本の子どもたちは小さいうちから、こうした教育的雰囲気の中で育てられるのだから、きっと優秀な大人になるに違いないと思った。中国もこうした日本政府の国民レベルを向上させるための取り組みを学ぶべきだと思った。

午後3時半、宮村さんがグランドプリンスホテルまで送ってくれた。宮村さん一家には

心から感謝する。

夜は東京の有名なスポット——お台場買い物に行った。

**日付：12月3日（月）8日目**

**大学名：北京航空航天大学**

**氏名：劉傑**

僕の家は農家なので、「野菜くらぶ」で説明されたほとんどのことは知っていたが、その現代的で合理的な経営と生産理念を聞いて、農業大国としての中国がこのレベルにまで達するにはまだまだ時間がかかり、農業生産モデルを徹底的に改善していかなければならないと思った。

今日のハイライトは何と言っても温泉だった。適温の心地よい湯につかったり、室内風呂と露天風呂を行ったり来したりして爽快だった。疲れきった体が俄かに感覚を失い、すべてから解き放たれたようなあの感覚……。まるで一滴の清水になったような気がした。

温泉の後の食事とカラオケでは大いに盛り上がった。代表団の気持ちが一つになり、自分たちが一つの「チーム」であることを初めて実感した。残念なことに、時間の関係で、カラオケは僕の歌心を満足させる前に終わってしまったが、今日は本当に楽しい一日だった。

**日付：12月3日（月）8日目**

**大学名：北京航空航天大学**

**氏名：楊一**

山地面積が70%を占める日本に「野菜くらぶ」のような農業地区があることはまったくの驚きだった。

福建省出身の呉博士から「野菜くらぶ」の経営モデルについての詳しい説明があり、その後、トマトの試験用ハウスの見学やトマトの味見をしたり、アスパラガス畑を見たりした。農業のことはよく解らないので、まったく素人的感想だが、この「くらぶ」の成功の鍵は日本の隅々まで普及した自動化にあると思った。ハウスのオーナーは自動制御装置が故障したらお手上げだというが、これまでそういう状況になったことはないそうだ。

その後、代表団は疲れた体を引きずるように天皇も訪れたことがあるという温泉地へと向かった。温泉につかった瞬間、全身が解き放たれるような感じがした。

夕食会では、僕と同じ生年月日の南開大学からの女学生と一緒にカラオケで一曲歌った。

**日付：12月3日(月) 8日目**

**大学名：南開大学**

**氏名：韓健**

都会を離れ、今日は日本の農村に見学に行った。日本のハウスは自動化の程度が中国のそれよりも高いというだけで、中国のものと大差ないように思われた。ただ、両者の一番の違いは、環境保護に対する認識だった。日本人の節約精神、特に水資源を大事にすることはよく知られているが、農業の灌漑用水についてもそれは同じで、先進的な技術で厳しくコントロールされていた。化学肥料の使用についても、天然のエコロジカルな肥料を使い、「三日漁に出て、二日網を干す」式に土壌を休ませてその活力を回復させるという科学的な管理モデルによって科学的な農業が行われていた。中国の社会主義新農村もこうした

方向性を目指しているが、その実現にはまだまだ時間がかかると思った。

夜は温泉旅館に泊まった。日本のいわゆる「温泉文化」をじかに体験することができた。日本人は入浴を神聖なものとして捉えているようだ。温泉旅館に泊まって温泉に入るとは単なる楽しみというよりも、いやなことはすべて洗い流し、心身ともに解放される一種の洗礼のようなものかもしれないと思った。今日はおそらく代表団のメンバーにとって一番楽しい夜になったのではないだろうか。夕食後、カラオケを歌い、各大学が一つに溶け合い、兄弟姉妹のようになり、本当に素晴らしかった。その時、僕は祖国を思い、家族のことを考えていた。異国の地でみんながこうしてここに居るのも何かの縁、大学生代表団の「兄弟姉妹」たちに感謝した。

**日付：12月4日(火) 9日目**

**大学名：北京大学**

**氏名：房諤**

朝、群馬県を出発して新幹線に乗った。高層ビルの立ち並ぶ大都市とは違う車窓の景色に心が癒される思いがした。

昼ごろ、全日空に着いた。この世界に名だたる航空会社の魅力についてこの目で確かめることができた。

午後、高ぶる気持ちを抑えて「我が家」のような中国大使館を訪ねた。大使は出張で不在だったが、大使館職員から温かいもてなしを受けた。また、公使への表敬訪問では、今回の日本訪問の意義をあらためて認識することができ、大きな収穫となった。

次に早稲田大学を訪問し、夜には日本の若者と交流するチャンスに恵まれた。夕食会での交流は決して表面的なものではなく、私は日本の女子学生と中国の農民工について話し合った。交流によってお互いの理解を深めることができたが、中国と日本はもっと交流をしていく必要があると思った。そうした交流によってはじめて中日間の友情が確かなものになるのだから……。

**日付：12月4日(火) 9日目**

**大学名：北京工業大学**

**氏名：楊波**

時間の経つのは本当に速い。アッという間に日本訪問の旅も終わりを告げようとしている。日本を離れるのが名残惜しく、何となく感傷的な気分になってきた。

全日空を見学して一番に感じたことは、中国もまだまだ研鑽の必要な分野があるということだった。また、メンテナンスセンターの複雑で先進的な構造や設計には目を奪われた。15年前に日本がすでにこれほど緻密な建造物を建てることができていることを考えると、中国もこの分野にもっと力を入れなければならないと思った。

午後、大使館に行ったが、たくさんのことを学ぶことができた。公使の話をほとんど速記のようなスピードでメモした。この急いで書きなぐった数ページのメモが、今後の勉強、仕事、生活にきっと役立つことになると思う。

その後、早稲田大学との懇親会があった。日本の大学生と様々な問題について議論しているうちに、すっかり友だちになった。両国の大学生が直面している就職の問題についても意見を交わし、お互いの状況についての理解を深めた。プレゼントの交換もあった。

早稲田大学の学生たちはコミュニケーション能力に長け、総合的な資質も高かった。こ

それは僕たちも見習わなければならないと思った。また、私立大学としてこれほどの規模にまで成長してきたは敬服に値すると思った。これは国の政策や国民の力によるものなのかもしれないが、企業の力も関係しているように思う。企業の社会に対する影響には、今回日本に来て学んだ企業理念や企業文化と合い通じるものがあるような気がした。

**日付：12月4日(火) 9日目**

**大学名：北京郵電大学**

**氏名：張朝偉**

最後の訪問先は全日空だった。企業精神のようなものについての話は聞けなかったが、ボーイング 747、767、777 の実物を見ることができた。概況紹介の重点をどこに置くかという問題だったかもしれないが、航空機のメンテナンスに関する知識や一般常識についての紹介が多かった。大いに視野を広げることができたが、この方面の知識に疎いために、全日空の技術レベルの高さと詳細な分業体制にただ感心するばかりだった。

早稲田大学との交流によって日本の友人ができたし、多くの中国人留学生にも会うことができた。今日会った日本人の中に中国に行ったことのある人がたくさんいたのが嬉しかった。

日本滞在中、和食の魅力を十分に味わうことができたが、中華料理への思いも拭い去れなかった。「北京ダック」、「京醬肉糸」(細切り肉の甘味噌炒め)、「小籠包」などがとても懐かしく感じられた。中国に行ったことのある日本人も中華料理は美味しいと褒めていた。

五千年の歴史を持つ中国には本当に数えきれないほどの伝統や文化があるが、中国ならではのものが徐々にその姿を消しつつある現実を見ると、中国はこの素晴らしい伝統文化をもっと大事にするべきだと思った。日本の友人が「日本で食べる北京ダックは高いうえに、本場の味にかなわない」と言っているのを聞いた時は嬉しく思う反面、中国の美食はいつになったら世界を制覇できるのかということを思い、少し残念な気持ちにもなった。

日記の前のページをめくりながら、明日はいよいよ日本を離れるのだと思った。とても名残惜しい気持ちがすると同時に、心がふっと温かい気持ちに包まれるような感じを覚えた。本当にたくさんの人々にお世話になった。言葉では言い表せないほど感謝している。みんなの健勝と中日友好を祈ろう。

明日もう一度ホストファミリーの末長さんに会えればいいのだが……。

**12月4日(火) 9日目**

**大学名：南開大学**

**氏名：王坤芳**

今日は得るものがたくさんあった。午後の公使の話は非常に示唆に富んだもので、いろいろと考えさせられた。重い責任を負わされている世代ではあるが、いろいろなことについて考えが不十分で、利己的で、歴史に対する責任感もはなから諦めてしまっているようなところがある。ますます複雑になっていく世界を前に、私たちはいったい何をすればいいのか……。

ガイドの呂さんから北洋艦隊のエピソードについて聞かされた時には、深く反省させられた。1880年代には、日本の識字率はすでに100%に達していたが、中国はその頃いったい何をしていたのか。日清戦争では、清の戦艦は明らかに日本のものより勝っていたにもかかわらず、なぜあれほどまでにさんざんに打ちのめされてしまったのか。これらの疑問

に答えることは、今後の中国の発展にとって有用のように思われる

早稲田大学での交流会も時間が足りないほどだった。同じ年代なので、話題に窮することとはなかった。会場は、一晩中熱気に包まれていた。この交流によって、たくさんの新しい情報を得ることができた。

中に一人三井住友に内定をもらっている学生がいたが、ここまで来るのに、数えきれないほどの難関があったという。9回にも及ぶ面接にパスし、さらにいくつかの筆記試験に合格して初めて採用されるという。日本企業が最も重視しているのは、その人のコミュニケーション能力、人と協力する能力と会社への忠誠心だ。ただ、日本企業の特徴の一つであった終身雇用制度が揺らぎ始め、ほとんどの若者が若いうちの転職に抵抗を示さなくなってきた。

**12月5日(水) 10日目**

**大学名：南開大学**

**氏名：趙陽**

日本での最後の夜を過ごし、今朝目が覚めたのは8時で、一番遅い起床時間となった。午前中、急いで有名な秋葉原電気街に買物に出かけた。手持ちの日本円を全部はたいてSONY T200、F70とiPod nanoを購入し、日本での最後の用事を済ませた。昼は日中経済協会主催の送別会があり、今回の企業訪問の時に会った企業や大学の責任者やホストファミリーの方々と再会し、いろいろと話に花を咲かせた。

午後は成田空港に向かい、《走近日企 感受日本》訪問活動に終止符が打たれた。10日間の訪問は日本を身近に感じる、掛け替えのない旅になった。たくさんの思い出をこれからゆっくり味わい、整理し、まとめて、そこからたくさんを学んでいきたいと思う。

中国の大学生を対象とした5年間の《走近日企 感受日本》活動が成功しますように！

中日両国国民がより深くお互いを理解できるようになりますように！

中日両国の友好が子々孫々まで続きますように！